

ヘーゲル哲学における学の始元と媒介性——ヤコービとラインホルトの受容と批判

真田 美沙 (ハイデルベルク大学)

本研究の課題は、ヘーゲル『大論理学』存在論の「学は何から始められなければならないか」における、学の始元が媒介されているというアイデアの背景を明らかにすることであった。この課題は次の二つに区分される。第一のものは、ヘーゲルがヤコービの信仰哲学をどのように受容し批判したのかという点を明らかにすることを通して、学の始元における直接性と媒介の不可分さの背景を提示するということである。そして第二の課題は、ヘーゲルは『差異論文』のなかでラインホルトの哲学の導入・前提を拒否しているが、一方で『大論理学』ではラインホルトを高く評価しているということを鑑みて、学の始元に関するラインホルト評価の推移の有無を明らかにするということである。

(1) ヘーゲルにおけるヤコービ受容と批判：一つの媒介としての〈媒介の止揚〉

ヘーゲルは『大論理学』存在論第一版(1812)始元論のなかで、学を始める際にあらゆる前提を止揚して、無前提な状態から開始しなければならないということを強調していた。これは同時に媒介の止揚でもある(GW21, S. 56)。しかし第二版存在論(1832)では、第一版にはない、直接性と媒介は不可分なものであるという新たな主張が示されることになる(GW11, S. 33; GW21, S. 54)。この両者の不可分性に関する主張の背景には、1817年のヘーゲルによる「ヤコービ書評」を挙げることができる。¹そのなかでヘーゲルは、ヤコービの「死の跳躍 *Salto mortale*」が〈媒介の外的な投げ捨て〉であるとして、自らの立場、つまり媒介の止揚もまた媒介であるという立場と区別している。ヤコービの立場がその「跳躍」によって知の領域から信仰のうちへと帰っていくのに対して、ヘーゲルは媒介の止揚であるところの「決意」(GW21, S. 56)を通じて学的な知へと進む。このように両者の相違は決定的なものである。たしかに『エンチクロペディ』や講義録のうちで、ヤコービの立場である直接知に関する言及は次第に増えていったのだが、それはその再評価に起因するのではなく、学の始元の直接性をいかに説明するかという問題が『大論理学』存在論第一版においてまだ十分に解決していなかったことに起因していると考えられる。

(2) 学の始元に関するラインホルト評価の推移

先に述べたように、『大論理学』存在論第二版においては、「媒介そのものの止揚であるところの媒介」(GW21, S. 56)という考えが提示されるのだが、これと同時にラインホルトの「仮説的で蓋然的な真なるもの」(GW21, S. 56 f.)から出発するという考えも引き合いに出される。この二つのモチーフの連関と整合性を探るうえで考えられなければならないのは、ラインホルトがはじめヤコービ

¹ ザントカウレンはこの「ヤコービ書評」と『エンチクロペディ』におけるヤコービの扱い方の違いという点に着目している(Sandkaulen 2010)。シックは、ヤコービ研究の枠組みの中で、ヘーゲルがヤコービを誤解しているとし、「思弁と媒介は死の跳躍そのものの中に組み込まれるのである」(Schick, S. 153)と主張するが、この解釈はヤコービの中にヘーゲルの思想を読み込みすぎていると言わざるをえない。

の立場を支持し、そののちにバルディリの『第一論理学綱要』を通じて実在論的転換 (Valenza 2004) を行ったこと、そしてヘーゲルもまたこのことを念頭に置いて学の始元の問題に取り組んでいたということである。

『差異論文』のなかでは、「根源的に真なるもの〔原真理〕 das Urwahre」² (TW2, S. 126) の概念が、ヤコービとラインホルトの立場の相違を浮かび上がらせるものとして言及されている。ヤコービが神としてのこの根源的に真なるものが知られることを否定するのに対して、ラインホルトはこの根源的に真なるものを哲学に暫定的に前提されるもの、最初理解できる真なるもの、蓋然的で仮説的なもの (TW2, S. 126 f.) として捉えるのである。ヘーゲルの学の始元論は、根源的に真なるものをいかに扱うのかというヤコービやラインホルトらの中での議論にその根をもつということが理解できる。

ヘーゲルは最終的にラインホルト流の哲学のための「前提」を置くというやり方を徹底的に拒否する。しかしそのようにあらゆる前提の拒否を行ったとしても、哲学の最初の出発点はいずれにしても置かれざるをえないため、ヘーゲルの学の始元においても「仮説的で蓋然的な真なるもの」から出発するということは受け入れられている。上記のヘーゲルによるラインホルトの評価、つまり哲学の前提を置こうとするラインホルトのやり方を拒否し、しかし「仮説的で蓋然的な真なるもの」から出発するという考えは受容する、というヘーゲルの態度は、基本的にその『差異論文』が書かれた初期から『大論理学』存在論第二版が準備された晩年に至るまで変わることはなかったことがわかる。

GW: Hegel, G. W. F. 1968 ff.: *Gesammelte Werke*. In Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft, hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg.

TW: Hegel, G. W. F. 1969-1971: *Werke in zwanzig Bänden*. Auf der Grundlage der Werke von 1832-1845 neu edierte Ausgabe, hrsg. von E. Moldenhauer und K. M. Michel, Frankfurt am Main. (Theorie Werkausgabe)

Sandkaulen, Birgit 2010: Dritte Stellung des Gedankens zur Objektivität: Das unmittelbare Wissen, in: *Der »Vorbegriff« zur Wissenschaft der Logik in der Enzyklopädie von 1830*, hrsg. von Alfred Denker, Annette Sell und Holger Zaborowski, Freiburg/München, S. 166-191.

Schick, Stefan 2006: *Vermittelte Unmittelbarkeit: Jacobis "Salto mortale" als Konzept zur Aufhebung des Gegensatzes von Glaube und Spekulation in der intellektuellen Anschauung der Vernunft*, Würzburg.

Valenza, Pierluigi 2004: Rationaler Realismus. Reinhold zwischen Fichte, Jacobi und Bardili, in: *Friedrich Heinrich Jacobi. Ein Wendepunkt der geistigen Bildung der Zeit*, hrsg. von Walter Jaeschke und Birgit Sandkaulen, Hamburg, S. 177-195.

田端信廣『ラインホルト哲学研究序説』萌書房、2015年。

² ラインホルトの「根源的に真なるもの」と「真なるもの」に関しては田端 (2015) を参照。